シリーズ・高専における英語教育のいま⑦

「落ちこぼれゼロ」をめざして

和歌山工業高等専門学校准教授　森岡　隆

勤務校での「補習」の現状

現在私は、和歌山県にある工業高等専門学校（以下、「高専」）で英語を教えており、今年度は「英語総合」・「英作文」など約四〇人のクラスを計五クラス担当している。そしてそれらのクラスの成績不振者と希望者を対象に、毎週放課後に一度、補習を実施している。

私の補習の方法は基本的に自習であり、定期テスト前の期間を除き、英語の授業の予習をさせている。予習中、教科書の内容について理解できない点があれば、学生たちは机間巡視している教員つまり私にそのつど質問し、教員は正解を導きだせるよう彼らにアドバイスする形で手助けをする。英語の学力が低い学生には、ノートの取り方や単語帳の作り方、単語の覚え方などのレベルから始め、学力の高い学生には、訳文その他について、授業でよしとする水準よりかなり高いレベルのことを要求している。成績不振者に限らず、私が担当するクラスの者なら学力にかかわらず誰でも参加してよく、参加回数に応じて平常点に幾ばくかの点数をプラスしている。私が受け持っているクラスは五つで内容的には三科目だが、毎回合計三〇―四〇人の参加がある。

実施の経緯

勤務校では二〇〇〇年頃から、学生が及第点を取れなかったのは教員の指導方法にも原因があるのだから、当該学生には次年度に補講をして十分な学力をつけてやるように、という教務的な大きな流れが起こっていた。そこで私はこの流れを逆手に取り、年度末に欠点（勤務校では六〇点未満）の評価を下されるずっと前に成績不振者たちを洗い出し、彼らに対して学力補充のための補習を実施することとした。こうして二〇〇一年度の春から、自習をベースとした補習を始めた。

開始当初の対象学生は、定期テストごとの成績評価において欠点を取っているいわゆる成績不振者とその予備軍だった。成績評価や隔週実施の小テストや授業の予習状況などを照らし合わせて対象学生を突き止め、成績向上のためと説いて半ば強制的に参加させた。彼らを補習に参加させ、予習をさせて、英語の教科内容を記憶させ習熟させるには、かなりの気力と労力が必要だった。

それでも、開始当初はひとクラス五―六人と対象人数も少なく、また学年を違えてそれぞれ週に一回、計二回開講していたため、比較的きめ細かに指導できた。学生一人一人に丁寧に説明することができたので、学生の我流の勉強方法をじょじょに変えさせるには、おおいに効果的だった。一方教員側からすると、放課後を週に二回も取られるのは負担が大きく、年々疲労が蓄積しつつあった。そこで七年目（二〇〇七年度）からは、やむを得ず全クラスの対象者をひと所に集めて行うこととし、現在もその形式で行っている。

さらに、成績不振者だけでなく担当するク

ラスの学生全員を対象とするのが、開始当初からの原則だったが、学力の低い学生の指導を補習の中心に据えていたのは否めず、学生全体へのフォローがいま一つできていなかった。そこで二〇〇八年度からは成績上位や中位の者たちの指導も全面的に受け入れ、ハイレベルな学習者の手助けにも力を注ぐこととした。

学生たちの反応

私の補習は教員側の事情で始めたものであるので、学生の反応には大いに耳を傾ける必要がある。参加学生たちの声を適宜アンケートで集めているが、例年これといった批判も否定論も出てこない。大多数は現在のやり方を良しとしてくれているようである。

補習を始めて二年目に、成績不振者の一人が私に次のように述べた。「これだけ時間を割いて指導してもらってるんやから、次の定期テストで（これまでよりも）いい点を取らんと、ほんま森岡先生に対して申し訳ないわ」当時は現在ほど大人数を相手にしておらず、学生一人一人との関係も密だったので、このような感想を抱いてくれたのだと思うが、正直なところ大変嬉しかった。現在でも、こちらが毎週指導していることに感謝してくれている学生が少なからずいることを、日々実感している。彼らの誠実な心に応えねばと、心から思っている。

効果・結果

学生たちが補習に参加する前と後の成績について緻密にデータを取り比較したことはないので、残念ながらここでは効果や結果についての数値資料は提示できない。けれども春からこつこつと補習に参加していた学生の英語の成績はおおむね、秋頃からじわじわと上がり始める。これは、勉強の仕方の基本を学び、予習をして授業に臨む習慣を身に付け始めた結果であり、中級・上級の英語力に向けた指導の成果だと考えても、あながち暴論ではないだろう。そのうえ英語力の向上だけでなく、努力とその結果による成果を学生たちに体験させてやれているのではと思う。

さらに教員と学生との信頼関係が、緩やかかも知れないが確実に構築される。何年も補習に携わっている経験から述べると、毎週のようにノートをチェックしたり質問を受けたりすることで、さまざまな学生と何度も言葉を交わすことになり、人間的なつながりが深まることはまず間違いがない。たとえ最初は英語の点数目当てであっても、何度も参加するうちにほとんどの学生はこちらを信頼してくれるようになるし、その結果、これまで以上に英語の勉強に時間を割くようになれば、これほど教師冥利に尽きることはない。

まとめと今後の課題

以上が、私が行っている補習の背景と現状である。

ノートの取り方、予習の仕方、テスト二週間前からの勉強の仕方などについて、成績不振者たちは、これまで受けてきたアドバイスや良いお手本をほとんど参考にせず、かたくなほど自己流で突き進んできている。英語の勉強をさせつつ、それらの点を少しずつ矯正し、効果的な自習ができる学生に、私が担当する間にできる限り近づけてやりたいと思う。そして理想をいえば、次年度に私が彼らの英語担当者でなくなった時でも、彼らが自分の力で自学自習ができるようにしてやれればと思う。私の成績不振者向けの補習の基本理念はまさしくこの点にあり、大学への編入学を希望している成績上位者向けの指導と合わせて、今後も学生の反応を見ながら、無理のない範囲で指導に時間を割いてやれればと思っている。

なお現在では、五クラスを対象に実施しているので参加人数が多く、特に定期テストの直前には七〇―八〇人が参加するため、一人一人をゆっくりときめ細かに見ることが難しくなっている。学生には、教員が流れ作業的にチェックに回っているようにも映りかねないので、なんとか早急に対策を練りたい。

学生たちが基本的な勉強法を身に付け、さらには英語に関心を持ち、それに伴ってさらに高い学力が付くよう、今後も努力したいと思っている。「落ちこぼれゼロ」を目指して、今後も補習の指導を続けたい。